

C 5 家庭科教育における「保育」領域の研究〔4〕—教師の現状（その1）—
都立久留米高 桑名有朱子 東京家政大 家政 川合貞子
宇都宮大 金崎美美子 上越教育大 大瀧ミドリ

（目的）家庭科教育では、人間がよりよく生きることとを、いかに創造し、保障していくかということが、主たる問題とされるが、特に、保育領域においては、衣・食・住等の領域とは異なり、人間そのものを対象としている。それゆえ、本領域の展開に当っては、教科書、教材等に反映されている人間観、発達観、社会観、さらに、教師自身のもつ価値観等が、大きな意味をもってくる。前年度は、「親と子が育ち合う観点」、「家庭や人間のとらえ方の多様性」等について、小・中学校で使用している教科書にどう表現されているかを分析し発表した。今回は、家庭科担当教師に対する意識調査により、保育授業の実態を知り、今後の保育教育のあり方を展望する。

（方法）質問紙を作成し、郵送により送付、回収とした。質問紙は、A（学校あて、授業時数・視聴覚教材等の有無）・B（家庭科担当教師あて）から成り、今回は、Bについて分析する。対象は、新潟、栃木、東京の小・中・高校の教師803名である。質問紙は、①教師自身について、②家庭科の各領域、および単元に対する生徒の関心と教師の考える重要度とのずれ、③講義以外の授業方法の実施の有無、④男女共修問題への考え、⑤価値観、⑥性差の認識、⑦保育教育観である。本報告では、①②③について分析、検討する。

（結果）①教師自身はわが子の保育を個人的解決をしている者が多い。②食物に対する関心度は、小・中・高校とも、又、三地域とも一番高い。保育領域に対しては、小学校で3・4位だが、学校段階が進むに従って2・3位になっている。又、領域間のランクづけは、教師の考える重要度より生徒の関心度の方が差が大きい。③小・中学校では教科書に準じて観察制作を行っている程度である。